

お手伝いができる子になってほしい



Q お手伝いして」と頼んでも「いや」と言う

お手伝いをしてほしいと思って頼むのですが、「いや」と言ってやろうとしません。無理やりやらせるのもどうかと思います。どうしたらよいでしょうか？

A 役に立ったという喜びが次の意欲につながります

子どもはお手伝いを通して、“誰かの役に立つ”という自己有用感や、ちょっと大きくなった喜びを感じることができます。これは子どもにとってとても大事な経験で、大きくなることへの希望につながるものだと考えます。

でも、子どもだってお手伝いを頼まれて嬉しい時とそうでない時があります。特に、お手伝いの内容や誘いかけるタイミングは大事です。お子さんは、ご家庭でのお手伝いを積極的にはやらないようですね。「いや」と言うわけは何か、考えてみたことはありますか？

これまでのことを思い返してみてください。例えば、お手伝いに誘いかけるタイミングはどうだったでしょうか？お子さんが遊びに夢中になっている時に誘いかけてはいなかったでしょうか？「今いいところなのに」という時に、気乗りのしないお手伝いをさせられると、やりたくない気持ちが先にたってしまう、お手伝いそのものが嫌になりかねません。

あるいは、お子さんが何か手伝いたいと思って行動した時、断ったことがなかったでしょうか？もちろんいろいろなご事情があると思いますが、そのときちゃんと“どうして手伝いを断ったのか”という理由をお子さんに伝えたでしょうか？お手伝いに前向きな気持ちになった時に、理由も分からないまま断られると、子どもは「お手伝いはしない方がよいのかもしれない」と思うようになります。

また、お手伝いをしてもらった後、感謝の気持ちを言葉や表情でしっかり伝えてきたでしょうか？「ありがとう。助かったよ」などと言ってもらえることは、大人でも嬉しいですね。まさかとは思いますが、そのときに「もっとこうすればよかったのに」と不満をもらしたり、お子さんの力以上のことを望んで批判したりということはありませんでしたか？先にも書きましたが、“お手伝いをして喜ばれた”という心地よい経験が、“次もお手伝いしよう”という気持ちにつながります。笑顔で「ありがとう。とっても嬉しかったよ」と伝え、ぎゅっとハグしてあげると、お子さんにも嬉しい気持ちが伝わって、きっと次の意欲につながると思います。

かつて、小中学生のときは「あなたは勉強をしていればいいの」とお手伝いをやらせてもらえなかったのに、大きくなってから「家のことをやりなさい」と言われて戸惑っているという話を聞いたことがあります。小さくても子どもは家族の一員です。幼児期の今から、少しずつタイミングをみながらお手伝いに誘い、やってもらったらたくさん褒め、家族の一員として一緒に生活する喜びが味わえるようにしていきましょう。



Q いやいや手伝ってくれるが、進んでやってくれない

「手伝って」と頼むと、あまりうれしそうではないのですが、何とか手伝ってくれます。気持ちよくお手伝いしてくれるとよいのですが、どうしたらそんな風になるのでしょうか？

A お手伝いの声掛けは、タイミングをみて

保護者の方が小さい頃、やりたかったお手伝いはありましたか？その反対にお手伝いを頼まれると、「いやだなあ、面倒だなあ」と思ったことはありませんでしたか？お子さんも、今、きっと同じようなことを経験しているのだと思います。お手伝いが楽しくなるのもならないのも、その時のタイミングが大事なのではないのでしょうか。

例えば、夢中になって遊んでいる時、もうちょっとで何かができるという時、「お手伝いして」と言われたらどんな気持ちになりますか？「えー、今いいところなのに」「何で今なの？」「いやだなあ」……きっとこんな気持ちになるのではないのでしょうか。それは大人も子どもも一緒です。

では、どんな時ならお手伝いが楽しく感じられるのでしょうか。例えば、遊びが一区切りついて少し手持ち無沙汰な時、以前から興味があることに誘われた時、お手伝いが誰かの役に立って嬉しさを感じる時など、タイミングと内容が大事だと思います。もちろん、いつもいつもそんなによいタイミングや内容があるわけではないかもしれませんが、少し工夫をすることで楽しさを感じて意欲がもてるようになると思います。

お子さんは、お手伝いを頼むといやいやでもやってくれるのですね。自分のことを後回しにしてでもやってくれているのですから、すごいことです。どうぞ、たくさん褒めてあげてください。「助かったよ」「〇ちゃんがやってくれたから、ほらこんなにできたよ」「手伝ってくれてとっても嬉しかったよ」等々温かい言葉のシャワーをかけてあげましょう。ぎゅっと抱きしめてもいいですね。お手伝いに気乗りせず、お子さんが不機嫌な様子でやった時も、「どうしていやいややるの」「あなたはいつもそうなんだから」「もっとしっかりやりなさい」なんて、できるだけ言わないようにしてくださいね。

嬉しい思いや役に立つ喜びをたくさん経験すると、子どもはお手伝いが楽しくなり、気持ちよく手伝ってくれることが増えてくると思います。お子さんの気持ちが前向きになるよう、お手伝いを頼む時はタイミングを見計らい、興味をもつものになるよう、少し配慮をしてみてください。



Q 料理に興味があり、包丁を使いたがる

料理をしているのをよく見ていて、時々「包丁で切りたい」と言い出します。料理に興味があるのはよいのですが、包丁は危ないので心配です。どうしたらよいのでしょうか？

A “やってみたい”という気持ちを大切に

お子さんは保護者の方がお料理をする姿がきっと大好きなのです。いろいろな食材を切ったり焼いたり煮たりすると、形や匂いなどがどんどん変化して、おいしい料理になるのを不思議に感じ、自分もやってみたいと思ったのではないのでしょうか。

お子さんが興味をもって見たり手伝ったりするのは、大切な“学び”の一つです。“学ぶ”という言葉は

“真似る”からきていると言われてしますので、お子さんがやってみたいと思ったのも、生活の中の学びの一つだと考えます。興味をもつことややってみたくなる気持ち、それ自体はとてもいいことです。是非、大切にしてください。

一方、包丁で“切る”という行為は、とても興味をそそることです。切る時にいろいろな音がしたり、食材の形が次々に変化したり、包丁とまな板でリズムカルな音を発したりなど、楽しそうに見えることがたくさんあります。そして、「包丁ってすごいな、自分も同じことをやってみたい」と思ったのかもしれませんが、ただし、ご心配の通り、危険もあります。そこに配慮すれば、お子さんに包丁を持たせることも可能だと考えます。

まず、お子さんは約束を守れる年齢でしょうか？約束の意味が分からなかったり、約束を破ることが多かたりするようでしたら、まだ包丁を持たせるのは早いかもしれません。包丁ではないお手伝い、例えば、玉ねぎの皮をむく、保護者の方が切ったものを容器に入れるなど、直接包丁に触れないお手伝いから頼んでみたらいかがでしょうか。そのとき、「お約束がちゃんと守れるようになったら、一緒に包丁を使おうね」と、楽しみになるような声掛けをするとよいですね。

普段からお子さんがちゃんと約束が守れるようでしたら、事前にしっかり約束をして、保護者の方と一緒に包丁を使うようにしましょう。包丁を使う約束として、例えば①必ず保護者の方と一緒に使う、②包丁を持って歩かない、③包丁を人に向けない、④包丁を持たない方の手は猫の手（指先を丸める形）にする、⑤使ったらきちんと元に戻すなど、必要なことをしっかり伝えましょう。「大好きな〇ちゃんが怪我をしないために、そして、おいしいお料理をつくるために大事なことなんだよ」と教えてあげてください。きっと真剣に受け止めると思います。



Q お手伝いをすると、「何かちょうだい」と言う

お手伝いを頼むと、必ず「何かくれる？」と言います。ご褒美がなくてもお手伝いできる子にしたいのですが、どうしたらよいのでしょうか？

A ご褒美が一概に悪いわけではありません

“手伝う”ってどういうことでしょうか。辞書には『他人の仕事を助けて一緒に働く。手助けをする。助力をする。』と書かれています。お手伝いは、“手伝ってあげよう”という気持ちが行動になるものですから、見返りやご褒美を期待して行うものではないということが本来の姿であると思います。ご相談の方も、きっと見返りを求めない、心からのお手伝いを願っているのですね。

ちょっと振り返ってみましょう。今まで、お子さんがお手伝いをしてくれたとき、何気なくご褒美をあげていませんか？「何かくれる？」と聞いてくるのですから、お子さんにとって、お手伝いの後は何かもらえるのが当たり前になっているのではないのでしょうか。

ご褒美が次の意欲付けになることもありますから、一概にご褒美をあげてはいけないというわけではないと思います。しかし、「これをしたら〇〇をあげるよ」といつもご褒美を与えるのも、ちょっと考えものです。それでは、ご心配されているように、ご褒美がなければ何もやろうとしない子になってしまうかもしれません。お子さんが保護者の方の願う姿に近づくためには、少し配慮が必要だと考えます。

お子さんの年齢が小さい場合は、手伝いをしてもらった後に「ありがとう」「とってもうれしかったよ」という温かい言葉をかけるとともに、時折ちょっとしたおやつ等をあげてもよいと思います。ただ

し、先にも記しましたが、手伝うたびにおやつをあげていると、おやつをもらうのが当然のようになり、ひいては何かもらわないと手伝わない、という姿につながります。あくまでもご褒美は感謝の気持ちを表す一つの方法だと考えてください。また、お子さんの年齢が少し大きい場合は、ものをあげるというご褒美は徐々に減らして、感謝の言葉と嬉しかった思いを表情豊かに伝え、“役に立った喜び”や“大きくなった実感”が味わえるようにしていきましょう。

大事なものは、“気持ち”です。「〇ちゃんが手伝いをしてくれてうれしかった」という気持ちを、表情や言葉、態度や行動で伝えてください。お子さんが「手伝ってよかった」という気持ちをもつと、それが次の“やってみようかな”という意欲につながります。是非、やってみてください。



Q お手伝いをしてもすぐに飽きてしまう

手伝うのが大好きで、「やりたい!」と言うのですが、お手伝いを頼むと、すぐに飽きて他の遊びを始めてしまいます。どうしたら最後までやる子になるでしょうか？

A やる気を伸ばしていきましょう

お子さんが“お手伝いするのが大好き”というのは、とてもよいことです。たくさん褒めてあげましょう。でも、やり始めてもすぐに飽きてしまうという姿がご心配なのですね。

お子さんにとっては、お手伝いは“楽しそうな遊びの一つ”なのだと思います。ですから、「やってみよう」と興味をもったら何としてでもやりたくなるのでしょう。保護者の方にせがんで思いが実現し、少しでもやったという事実によりお子さんの思いが満たされるため、他に興味が移っていくのではないのでしょうか。大人から見ると、途中でお手伝いの仕事を投げ出して無責任なように見えますが、それは（年齢によっても違いますが）ある程度仕方がないことなのではないかと考えます。やってよいこと悪いこと、楽しいことや責任をもつことなど、子どもは日々いろいろなことを学んでいる途中なのです。

以前、こんなことがありました。園庭にたくさん落葉が落ちていたため、先生が箒（ほうき）で掃き集め始めました。新しいことに興味津々の3歳児たちがすぐに集まって来て、「何やってる?」「やりたい」「それ（箒）かして」と、先生が使っていた箒をもらったり、掃除道具を倉庫から調達してきて、ひとしきり掃除ごっこが始まったのです。3歳児ですからやりたい思いはあるけれど、先生のように上手に落ち葉を掃き集めることができません。そのうちに向こうの方から友達の楽しそうな笑い声が聞こえてきました。すると箒もちりとりもその場に放り出して、走り出した子どもたち。もう掃除ごっこに満足して、心は次の“おもしろそうなこと”に移っていたのです。こんな時、どうしますか? 「まだ落ち葉が残っていますよ。最後までやりなさい!」と叱りますか? それとも、まあ仕方ないと諦めますか? 状況や年齢によって対応は違いますから一概に正解はありません。でも、その時の先生は、使った物を片付けるように言って、それ以上子どもたちにやらせようとはしませんでした。

ご家庭で、お子さんがお手伝いに飽きてしまっても、まずは使っていたものを片付けるように声をかけ、見届けることは必要だと思います。そして、「ありがとう、助かったよ」「今度はもっとやってくれとうれしいな」と、次のお手伝いに意欲がもてるよう声をかけておくこともお勧めします。そして、その後お手伝いをした時に、少しでもじっくり取り組む姿が見られたら、たっぷり褒めてあげてください。年齢や経験、興味によっても違いますが、少しずつお手伝いをする時間が延びるようになり、途中で放り出さずに最後までやる姿が増えてくると思います。何事も一度にはいきませんので、焦らず取り

組んでください。

誰かの役に立つこと、「ありがとう」と言ってもらえることは、大人もうれしいことですが、子どもにとっても大きな喜びです。それは、自己有用感につながります。幼児期の今、是非、子どもたちにやる気と自信を育てていきましょう。